



TITLE:

「タランギニー」から「ターリーフ」へ 15-17世紀カシミールの歴史叙述の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

小倉, 智史

CITATION:

小倉, 智史. 「タランギニー」から「ターリーフ」へ 15-17世紀カシミールの歴史叙述の研究. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19213>

RIGHT:

許諾条件により本文は2016-07-01に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	小倉智史
論文題目	「タランギニー」から「ターリーフ」へ 15-17世紀カシミールの歴史叙述の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>南アジアの北西端に位置するカシミール地方は古代から中世前期にかけてサンスクリットの学芸が栄え、仏教やバラモン教・シヴァ教の学匠たちが学問的思索を行った地であった。現在のカシミールは地域人口の9割以上をムスリムが占める、南アジアにおけるムスリム多住地域の1つとなっている。</p> <p>カシミールの文化史上の1つの大きな特徴は、歴史叙述の伝統である。「史書なきインド」と言われるように、南アジアでは非ムスリムがサンスクリットで史書を編纂することは殆どなかった。他方カシミールでは、12世紀半ばにパンディットにして詩人Kalhaṇaがサンスクリットの王統叙事詩<i>Rājatarāṅgiṇī</i>を編纂した。ひとえにこの作品の存在ゆえに、カシミールは南アジアにおける例外的な地域という評価をされてきた。</p> <p>カシミールのサンスクリットによる歴史叙述の伝統は、14世紀前半に同地にムスリム王朝が立ってもなお継続した。すなわち、ムスリムのスルターンの庇護のもとにKalhaṇaの<i>Rājatarāṅgiṇī</i>の続編が連綿と編纂されていった。カシミール最初のムスリム王朝、シャームール朝（1339-1561）は言語の使用状況からペルシア語文化圏に属していたと考えられるが、そのような文化的状況の中でサンスクリットによる歴史叙述を続けていたことは注目に値する。</p> <p>カシミールでペルシア語による歴史叙述が始まるのは、シャームール朝末期の16世紀のことである。16世紀には回想録や聖者伝のような体裁を備えた史書が編まれたが、1586年にカシミールがムガル朝に併合され、Kalhaṇaの<i>Rājatarāṅgiṇī</i>やその続編がアクバル宮廷に献呈されると、それらサンスクリットの史書はアクバルの要請のもとペルシア語に翻訳された。アクバル治世の1590年代以降、<i>Akbar-nāmah</i>や<i>Ṭabaqāt-i Akbarī</i>、<i>Gulshan-i Ibrāhīmī</i>といった数多くのペルシア語のインド総合史が編纂されたが、<i>Rājatarāṅgiṇī</i>のペルシア語訳はこれらの史書にカシミールの歴史情報を提供した。<i>Rājatarāṅgiṇī</i>のペルシア語訳については多くの先行研究で触れられているものの、写本が何点現存しているのか、翻訳者は誰なのか、いつ翻訳されたのか、といった基本的な事項すら十分に知られているとは言い難い。</p> <p>そして1610年代に入り<i>Bahāristān-i Šāhī</i>やḤaydar Malikの<i>Tārīḥ-i Kašmīr</i>など、ペルシア語によるカシミール地方史が編纂され始める。これらの地方史書を執筆するにあたって、著者たちは<i>Rājatarāṅgiṇī</i>やそのペルシア語訳、すなわち異教徒によって編纂されたサンスクリット文献の歴史情報に拠った。しかし17世紀以降編まれ始めたペルシア語によるカシミール地方史の叙述は、先行する<i>Rājatarāṅgiṇī</i>の情報をそのまま引き写したものではない。両者の記述を比較してみれば、多くの箇所では情報が新たに追加されていることが分か</p>			

る。そのような情報の追加は概して、異教徒によって書かれた歴史を、イスラームの歴史として再解釈する知的営為と見做しうる。ここに、異文化間の接触・交流という広く人文学一般の問題に還元しうる研究の主題を看取できよう。

本稿は、このような中世後期から近世にかけてのカシミールにおける、ムスリム王朝下でのサンスクリットによる王朝史叙述から、ムガル朝初期のペルシア語による地方史叙述に至る、歴史叙述言語の移行過程を扱うものである。本稿で扱う時代は、シャーミール朝治下にJonarājaがKalhaṇaのものに続く*Rājatarāṅgiṇī*を編纂した15世紀半ばを上限とし、ムガル朝のジャハーンギール時代にḤaydar Malikが彼の*Tārīḥ-i Kaśmīr*を編纂した1620/21年を下限とする。

本稿で考察の対象となる文献は1) シャーミール朝時代に編纂された一連の*Rājatarāṅgiṇī*作品群、2) ムガル朝宮廷で編纂された*Rājatarāṅgiṇī*のペルシア語訳、3) 16世紀にカシミールで編纂された、ペルシア語の聖者伝や、その要素を含む史書、4) 17世紀第1四半期までに編纂された、ペルシア語のカシミール地方史である。本稿において筆者が明らかにしようとするのは、以下の4点である。1) シャーミール朝時代にKRTの続編群を編纂したバラモンたちは、ムスリムの君主による支配をどのように正統化したのか、そして同じ社会の中で共存しているムスリムたちをどのように理解し、表象したのか。

2) *Rājatarāṅgiṇī*はいつ、誰によってペルシア語に翻訳されたのか、またムガル朝初期に編纂されたペルシア語史書に、*Rājatarāṅgiṇī*に基づいた歴史情報はどのように継承されたのか。3) *Rājatarāṅgiṇī*を参照していない16世紀のカシミールで編纂された聖者伝や史書は、その叙述においてどのような特徴を持つのか、4) *Rājatarāṅgiṇī*の情報を継承したペルシア語のカシミール地方史には、どのような情報が追加されているのか、そしてその追加された情報は、著者たちの意図や、彼らが生きた時代の社会的・宗教的な背景をどのように反映したのか、である。

本稿の構成は以下の通りである。第2章以降の本格的な考察に先立って、まず第1章でシャーミール朝・チャク朝時代の政治史を概説する。第2章ではシャーミール朝時代に編纂された3つの*Rājatarāṅgiṇī*続編群を取り上げて、ムスリム王朝下で歴史を叙述したバラモンたちは、支配者であるスルターンや、共生しているムスリムたちをどのような存在として理解し、表象したのかを明らかにする。第3章では、*Rājatarāṅgiṇī*ペルシア語訳に関する歴史情報と現存する*Rājatarāṅgiṇī*ペルシア語訳とされる写本群を取り上げて*Rājatarāṅgiṇī*がいつどのようにペルシア語に翻訳されたのかを論じる。続いて第4章では、*Rājatarāṅgiṇī*の歴史情報がムガル朝初期に編纂されたペルシア語史書にどのように継承されたのかを明らかにする。第5章では、16世紀に編纂された聖者伝や、聖者伝的性格を持つ史書における叙述の特徴を論じる。手がかりとして取り上げるのは、カシミールのムスリム社会において当時も今も象徴的建造物と見做されているハーンカーヒ・ムアッラーに関する記述である。そして第6章では、ペルシア語カシミール地方史において追加された歴史情報、特に中央アジア方面から到来したスーフィーたちと、カシミールのスルターンや在地有力者た

ちとの親交を語る逸話を検討する。

第2章ではシャーミール朝時代にJonarāja、Śrīvara、Śukaの3人によって編纂された一連の*Rājataranṅiṇī*の中で用いられている、Yavana・Mleccha・Turuṣkaといったサンスクリットの術語に注目し、それらの術語を抽出・分析した上でムスリムの支配下において非ムスリムはムスリムのことを、そして自分たちのことをいかなる存在としてとらえ、表象したのかを論じた。まず、王朝の支配者たるスルターン家の成員たちは術語の適用対象から除外されている。3人のバラモンたち、特にJonarājaは*Mahābhārata*やシヴァ教に基づいてスルターンたちの支配を正統化している。一般のムスリムに対しては3人の表象は三様である。Jonarājaの*Rājataranṅiṇī*においては、ムスリムは先行するサンスクリット文献と同じように、ブラフマニカルな社会的・倫理的規範に対立する異邦人として表象されている。僅かにムスリムの信仰面に関する言及も見られるもののJonarājaがイスラームについてどの程度の知識を持ち合わせていたかは不明である。Śrīvaraの*Zaynataranṅiṇī*と*Rājataranṅiṇī*においては、イスラームの信仰者としてムスリムが表象される事例が多い。Śrīvaraはイスラームの基本的な知識を持っていたことが明らかであり、彼らの信仰をdarśanaとして論じている。更にŚrīvaraはHinduたちが奉じているdarśanaにも自覚的でありHinduのdarśanaとイスラームと対置させていた。それぞれの宗教における聖典の内容をそれぞれの信仰者は遵守せよと主張するŚrīvaraの思想に、一種の宗教多元主義を読み取ることも可能であろう。但し、Śrīvaraのそのような思想はŚukaに継承されたわけではない。

第3章では*Rājataranṅiṇī*がいつどこで誰によって翻訳されたのかを論じた。1589年6月にスリナガルに行幸したアクバルの許に献呈された*Rājataranṅiṇī*の写本は翌7月にMuḥammad Šāhābādīによってペルシア語への翻訳が開始された。このŠāhābādīの手による翻訳の写本は、現在ロンドンとコルカタに3つ現存している。また1591年には‘Abd al-Qādir Badā’unīがŠāhābādīの訳に修正を加えたが、こちらの写本は未だ発見されていない。アクバル宮廷に献呈された*Rājataranṅiṇī*の写本は、JRTの部分にPs-JRTの詩節を含むものであった。但し追加されている詩節全てがペルシア語に翻訳されているわけではない。

第4章では*Rājataranṅiṇī*に記録されたカシミール史に関する情報が、そのペルシア語訳を経て、どのようにムガル朝初期に編纂されたペルシア語史書に継承されたのかを論じた。*Rājataranṅiṇī*のペルシア語訳はムガル朝初期を代表するムスリム史家たちに参照され、彼らが著した史書においてカシミール史の部分の情報源となった。16世紀半ばから17世紀第1四半期にかけて編纂された諸ペルシア語史書のシャーミール朝の情報を見比べると、アクバル宮廷で*Rājataranṅiṇī*がペルシア語に翻訳されたのを契機として、王統の情報がより正確になっていることが明らかとなる。しかし、アクバルに献呈された*Rājataranṅiṇī*の写本はPrājyabhaṭṭaによる*Rājāvalipatāka*を欠いていたため、*Rājataranṅiṇī*のアクバル宮廷訳には1487年から1512年までの歴史情報は反映されなかった。その結果、ペルシア語訳に基づいて編纂された史書においてクロノロジーの錯簡を発生させることになった。

一方*Bahāristān-i Šāhī*の如き、*Rājataranṅiṇī*のアクバル宮廷訳を参照するのではなく、

サンスクリット原典を直接参照して編纂された史書も存在する。同書の著者は、Kalhaṇaの*Rājatarāṅgiṇī*を参照せず、カシミール古代史の情報を *Ġāmi' al-Tawārīḥ* に頼っていた。またジャハーンギール治世の1618年に*Rājatarāṅgiṇī*をペルシア語に訳することをḤaydar Malikから依頼されたMuḥammad Ḥusayn b. 'Alī Kaśmīrīは、既に存在していたアクバル宮廷訳の縮約版とBSを参照しつつ、*Rājatarāṅgiṇī*のサンスクリット原典をも参照してそれら2書の記述を検証し、新たな*Tārīḥ-i Kaśmīr*を編纂した。そして、それを基にして、今度はḤaydar Malikが自ら*Tārīḥ-i Kaśmīr*を執筆した。彼の*Tārīḥ-i Kaśmīr*の成立をもって、「ペルシア語カシミール地方史」の様式が確立することになる。

第5章では、16世紀に編纂されたペルシア語の史書と聖者伝、すなわちSayyid 'Alī著作の*Tārīḥ-i Kaśmīr*と'Alī Kaśmīrīの *Tuḥfat al-Aḥbāb*を取り上げて、カシミールの中心都市スリナガルに築かれたスーフィーたちの修行場、ハーンカーヒ・ムアッラーについての両書における記述の特徴を論じた。ハーンカーの建造過程に関しては両書の記述はほぼ一致している。それらの記述はハーンカーのワクフ文書の写しとされる文書の記述内容とも一致するものである。しかし、15世紀末から16世紀前半にかけてのハーンカーに関する両書の記述は全く異なっている。*Tārīḥ-i Kaśmīr*と*Tuḥfat al-Aḥbāb*には共に著者の陣営に属する人物がハーンカーのワクフ管財人に任じられるという記述が現れるのである。他の史料の記述と比較検討する限り、両書の記述はそのいずれも史実とは見做し難い。これらの記述は2人の著者の政治的・宗派的立場を反映した「物語」と思われるが、このような2つの「物語」が生まれた事実は、当時のカシミールのムスリム社会における、ハーンカーヒ・ムアッラーの影響力の大きさを裏付けている。

第6章では16世紀後半から17世紀第1四半期にかけて編纂された3つのペルシア語史書、すなわちSayyid 'Alīの*Tārīḥ-i Kaśmīr*、*Bahāristān-i Šāhī*、Ḥaydar Malikの*Tārīḥ-i Kaśmīr*に収録されている、中央アジア方面からカシミールに到来したスーフィーたちの伝承、就中シャーミール朝のスルターンたちや他の在地有力氏族との交流を綴った逸話を取り上げた。そしてそれら逸話において、スーフィーたちがカシミールの政治史の経過の中でどのような影響を及ぼした存在として描かれているかを論じた。カシミールに到来したスーフィーたちと有力者たちの交流に関する逸話は、概して有力者たちに正統性を与え、彼らの支配を正統化する内容である。そしてスーフィーが在地有力者たちに支配の正統性を与える逸話の内容は、*Rājatarāṅgiṇī*などから導かれるカシミールの実際の政治史の推移、有力者たちの栄枯盛衰に沿ったものである。そのような逸話は、サイドが世俗君主の支配を正統化するというシャーミール朝時代の同時代的な支配観を踏まえた上で、後世の歴史状況や年代記を記した著者たちの立場の影響のもとに構築されたものである。

以上6章からなる研究により、ムスリム王朝下にサンスクリットで歴史を叙述したバラモンたちのムスリム観、*Rājatarāṅgiṇī*のペルシア語への翻訳過程と現存する写本への同定、ムガル朝初期に編纂されたペルシア語史書における*Rājatarāṅgiṇī*に基づく歴史情報の受容の有り様、16世紀カシミールのムスリム社会におけるハーンカーの象徴性と歴史叙述への

影響、カシミールのペルシア語歴史叙述におけるスーフィー伝承の歴史的な意味を明らかにすることが出来た。

(論文審査の結果の要旨)

フランス人フランソワ・ベルニエ (1620-1688) は数学者、物理学者、哲学者ピエール・ガッサンディの弟子であり、また医師や学術顧問としてムガル帝国の要人に仕え、興味深い『ムガル帝国誌』を残した作家として知られる。彼はまたそのインド滞在中に西北部のカシミール地方を訪れた最初のヨーロッパ人であり、1664-5年アウラングゼーブ帝のカシミール行幸に同行してその記録を残している。ベルニエはカシミールがムガルのアクバル帝によって征服された後、この国独自の言語で書かれた歴史書がペルシア語に翻訳されたこと、そしてそれを彼自身が所有していたことをその著作の中で記しているが、この歴史書こそ、本論文でその成立や内容についての分析、サンスクリット原典と手写本としてインド国内及び、英国、ドイツの各地の図書館に所蔵されるペルシア語訳テキストの対照・校合が詳細・厳密におこなわれていく *Rājatarāṅgiṇī* に他ならない。

論者によれば、現在のカシミール地方は人口の9割以上をムスリムが占める南アジアのムスリム多住地域のひとつであり、カシミール文化史上の大きな特徴は「史書なきインド」といわれる概況の中、12世紀半ばにパンディットにして詩人 Kalhaṇa がサンスクリットの王統叙事詩 *Rājatarāṅgiṇī* を編纂し、ひとえにこの作品の存在ゆえに、カシミールは南アジアにおける例外的な地域という評価をされてきたことであるという。カシミールにおけるサンスクリットによる歴史叙述の伝統はこの地にムスリム王朝が成立した14世紀前半以降も継続し、*Rājatarāṅgiṇī* の続編が編纂された。1586年にカシミールがムガル帝国に征服・併合された後、これらの史書はアクバル宮廷に献呈され、それらのペルシア語訳が作成された。本論文で論者が明らかにしようと試みたのは、1) カシミールに成立した最初のムスリム王朝であるシャーミール朝時代に *Rājatarāṅgiṇī* の続編群を編纂したバラモンたちは、ムスリムの君主による支配をどのように正統化したのか、そして同じ社会の中で共存しているムスリムたちをどのように理解し、表象したのか。2) *Rājatarāṅgiṇī* はいつ、誰によってペルシア語に翻訳されたのか、またムガル朝初期に編纂されたペルシア語史書に、*Rājatarāṅgiṇī* に基づいた歴史情報はどのように継承されたのか。3) *Rājatarāṅgiṇī* を参照していない16世紀のカシミールで編纂された聖者伝や史書は、その叙述においてどのような特徴を持つのか、4) *Rājatarāṅgiṇī* の情報を継承したペルシア語のカシミール地方史には、どのような情報が追加されているのか、そしてその追加された情報は、著者たちの意図や、彼らが生きた時代の社会的・宗教的な背景をどのように反映したのか、の4点である。

本論文は、研究史、史料解題を含む序に続いて、6章構成の中で上記四つの課題が考察される。序の部分の史料解題は、本論文で中心的に扱われるサンスクリットとペルシア語の史料群を、それらのテキストの内容を解説し、手稿本の所在や現況を伝える貴重で、堅実な内容を持っており、今後のカシミール地域の歴史研究に裨益するところが大きい、高水準の労作である。以下、第1章でムガル帝国によるカシミール征服以前にカシミールを支配していたムスリム王朝であるシャーミール朝とチャク朝の歴史概説が述べられ、第2章で上述の課題1) が、第3章と第4章で上述の課題2) が考察される。

第2章中で重要な指摘は、*Rājatarāṅgiṇī* の続編のひとつの編者である Śrīvara が明らかにイスラームの基本的な知識を持っていたこと、ムスリムの信仰を *darśana* として論じていること、Śrīvara は Hindu たちが奉じている *darśana* にも自覚的であり、Hindu の *darśana* とイスラームと対置させていたという点である。それぞれの宗教における聖典の内容をそれぞれの信仰者は遵守せよと主張する Śrīvara の思想に、一種の宗教多元主義を読み取ることも可能であろうと論者は述べている。

第3, 4章ではムガル帝国によるカシミール征服後、アクバル帝に献呈された *Rājatarāṅgiṇī* について1590年にはそのペルシア語訳が開始され、Muḥammad Šāh-ābādīによるペルシア語訳はムガル帝国初期を代表する著名なムスリム史家たちに参照され、彼らが著した史書においてカシミール史の部分の情報源となっていたこと、またこの翻訳を利用しなかった著者不明の *Bahāristān-i Šāhī* という歴史書（1614年頃編纂）も存在し、1618年には、この書とアクバル宮廷訳縮約版及び *Rājatarāṅgiṇī* のサンスクリット原典を参照して在地有力家系出身で、ジャハーンギール帝治世にカシミールの地方長官を務めた Ḥaydar Malik が *Tārīḥ-i Kaśmīr* を執筆したことが考証されていく。この作品の成立を以てペルシア語カシミール地方史の様式が確立されたと論者は結論付けているが、丹念な文献精査に基づく考察には十分な説得力がある。

第5, 6章では上記の課題3)、4) が考察される。考察の前提として論者は、中央アジア起源のイスラーム神秘主義教団（タリーカ）であるクブラウィーヤとヌールバフシーヤがシャーミール朝時代カシミールに到来し、イスラーム化の進展に寄与したという伝承の記録を取り上げる。そして第5章ではカシミールの中心都市スリナガルに建設された修道場ハーンカーヒ・ムアッラーのワクフ文書の内容にも言及しながら、Sayyid ‘Alī の *Tārīḥ-i Kaśmīr* と ‘Alī Kaśmīrī の *Tuḥfat al-Aḥbāb* という、ヌールバフシーヤ、反ヌールバフシーヤの立場に立つふたつのペルシア語史料の記述を検討し、カシミール地域における上記修道場の存在理由の由来に説き及ぶ。続く第6章では、Sayyid ‘Alī の *Tārīḥ-i Kaśmīr*、*Bahāristān-i Šāhī*、Ḥaydar Malik の *Tārīḥ-i Kaśmīr* という3点のペルシア語史料中に見えるスーフィーと在地有力者にまつわる逸話の内容や歴史的背景が分析され *Rājatarāṅgiṇī* などを典拠とするカシミールの歴史を利用しながらスーフィー（イスラーム神秘主義者）が在地有力者に支配の正統性や権威を賦与したことを、詳細な史料引用により具体例を列挙することで巧みに論証している。

本論文の全体を通じて、サンスクリット、ペルシア語の双方に通じた論者の優れた語学力、文献解読能力が遺憾なく発揮されており、南アジア・ムスリム文化史、カシミール史に対して行なった本論文の歴史文献学的研究の成果に高い評価が与えられることは疑いを容れないであろう。17世紀のフランス人作家ベルニエが既にその歴史的な価値を認識していた *Rājatarāṅgiṇī* のペルシア語訳がいかなる性格と背景を持ちながら成立したものか、それらが同時代のカシミール地方といかなる関連を持ち、後世への影響はいかほどのものであったか、イスラームのカシミールへの浸透や定着はいかにして実現していったのか等の課題を、多数の文献史料を博搜して本論文中で明らかにした論者の功績は、今後の南アジア地域歴史文献研究の基盤や模範となるものであろう。

但し、本論文において全く瑕疵が見られないわけではない。特に第1章の主題となっている14-16世紀カシミールのムスリム王朝史概説においてははいま少し綿密な政治史研究と分析が望まれるが、それは十分な研究実績を蓄積した今後の論者による研鑽によってたやすく実現されることになるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成27年5月28日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。